



ASSOCIATION FOR RENGEIN TANJOJI
INTERNATIONAL COOPERATION.

認定特定非営利活動法人

れんげ国際ボランティア会

みろくの風

Vol
71



ミャンマーの子どもたち

- contents -

目次

- 40周年を迎えて 2
事務局
- コロナ禍支援 3
タイ・バンコク プラティープ財団
- 豪雨災害支援 4・5
事務局
- ミャンマーだより 6・7
平野所長
- お知らせ 8



れんげ国際ボランティア会 40周年を迎えて

事務局

アルティック(れんげ国際ボランティア会)は1980年に創設され、昨年で40周年を迎えました。さて、1980年とはどんな年だったか覚えていらっしゃるでしょうか?総理大臣は大平正芳氏でした。国内では竹の子族やインベーダーゲームが流行っていました。山口百恵さんが結婚して芸能界を引退した年でもあります。政治的な出来事としては、ソビエト連邦のアフガニスタン侵攻に抗議し、日本は西側諸国とともにモスクワオリンピックを бойкотしました。歌謡曲は「贈る言葉」や「昴」が流行っていた頃です。懐かしいですね。

●「思い」が作り上げる活動

日本が経済発展を謳歌していたころ、アジアでは大きな出来事が起こりました。インドシナ半島での大量の難民発生です。ラオス、ベトナム、カンボジアなどの人々が国状の不安定による迫害や生活苦により、助けを求めて命からがら近隣の国々へと脱出しました。その数は150万人とも言われています。特にカンボジアでは極左のポル・ポト政権による大虐殺により多くの命が奪われ悲惨な状態でした。

に力を注ぐこととなります。数年後には難民は欧米諸国に移住したり、祖国に帰還してほぼ落ち着きます。しかし、気づいてみるとア



会長、ダライ・ラマ法王と共に

ジア諸国の人々の普段の暮らしは難民キャンプと同じくらい(場合によってはそれ以上)貧困にあえぐものでした。国の体制が稚拙なため、経済、治安、人権、教育などの面で大きな問題を抱えていました。そこでアルティックは難民問題をきっかけとして、その後タイ、カンボジア、スリランカ、などのアジアの国々へと支援の場を移しました。

●チベット難民との出会い

さらに1997(平成9)年、当会の母体である蓮華院誕生寺が、インドにてチベット僧侶のかたがたに仏画を作成して頂きました。作成の仕上げに当たってはチベット人僧侶3人が来寺し、昼夜を問わず作成に尽くしました。その献身的な姿に私達は大変感動致しました。それをご縁にチベットの人々とお付き合いする中で、徐々にチベット難民の容易ならざる過酷な歴史と困難な現状を知ることになりました。今も続く中国共産党の横暴に対して、やはり「黙って見過ごすわけにはいかない」ということで、これまで20年以上の支援を続けております。その結果、チベット人の精神的拠り所であるダライ・ラマ法王が、私達の支援に恩義を感じて頂き、2005年には熊本にお越しになつて講演をして頂くこととなりました。

さらに、8年前からは平野喜幸(現地所長)という人材を得て、ミャンマーで学校建設と村落開発の活動を行っています。ミャンマーのイラワジ管区(州)には今年度で88校の建設



カンボジアでの植林事業

が成りました。

1980年以来アルティックは40年の長きに亘つて活動を続けていますが、実は同じようにこのころ全国には多くの国際協力団体が誕生しています。しかし現在まで活動を続けている団体はそう多くはありません。これは設立当初からの長年のご理解とご協力を頂いた会員の皆様がたのお陰であると存じます。皆様にご敬意を表するとともに御礼申し上げます。

本来なら40周年の記念事業などを執り行うところですが、コロナ禍の時期でもあり、それは自粛いたしました。代わつて、優秀な人材3人をスタッフとして招き、活動を充実させるとともに、本部におけるサポート体制や広報活動に厚みを持たせ、将来のアルティックの発展に尽くしてまいりたいと考えます。今後とも「アジアの国々の発展」と「日本との共生」を願うアルティックの活動をよろしくお願ひ申し上げます。おわり

コロナ禍支援報告

ドゥアン・プラティープ財団(タイ・バンコク)

皆様から頂いた新型コロナウイルス禍支援募金は、国内では子ども食堂やフードバンク、洪水被災支援でのコロナ感染予防措置、そして海外ではチベット難民、タイ・バンコクの貧困地域にて活用させて頂いております。その中で今回は、タイ・バンコクの貧困地域での活動の様子をご報告させて頂きます。

アルティックでは長年タイ・バンコクの貧困地域「クロントイ・スラム」を支援してきました。そんなクロントイ・スラムを新型コロナウイルスが直撃しました。コロナ禍に於いては、貧しい地域、貧しい人ほど脅威となります。それは次の理由からです。

まずコロナ自体の情報が届きません(パソコンでの情報はもちろん新聞なども読んでいけませんので、どうやって感染するかもわからず、効果的な予防方法も知りません)。また情報が届いても予防するべきがありません(不衛生で密な居住環境であり、手洗いがいなどの習慣もなく、予防のための衛生用品も買えません)。さらには感染してもなかなか病院に行くことができません。

タイでは数年来、景気が悪化して失業者が増えています。新型コロナウイルスの感染拡大はそれに追い打ちをかけ、最も貧しい人々が暮らすスラムを直撃しています。「働きたい」、「子どもたちを何としても護りたい」。そんな悲痛な叫びとともに、長年友好関係にあるバンコクの慈善団体プラティープ財団より支援の要請がありました。

予想失業者は2,000万人と推計されていますが、その中で実際に給付金が登録出来て支給されるのはわずか1/4の500万人くらいと言われています。

◆ 新型コロナウイルスによるタイの感染者数は4月8日現在、2,220人、死者26人と発表されており、クロントイ・スラムでも住民13人が感染しました。これ以上の感染と拡大は何としても食い止めなければなりません。ドゥアン・プラティープ財団では各地区の住民組織の代表たちとも話し合い、ただちに次の5つの取り組みを開始しました。

1. 家屋の二斉消毒。スラムの家々は密集し、狭い部屋に何人もが暮らしているので特に必要。
2. スラムに住む子ども、高齢者、青年を対象に感染症に関する予防キャンペーンを開始する。
3. 寝たきり老人や生活困窮者に対して食糧や生活必需品を届ける。

4. スラム内の失業者の実状をすみやかに調査して、救済・法的手続きを促進する。

5. マスク、フェイスシールド、除菌液などを準備し、配布する。

以上、財団のコロナ禍での取り組みをご報告させていただきました。新型コロナウイルス問題は、この先まだ収束のメドも立っておりません。日本でおおじけになりました方々のご冥福をお祈りいたしますと共に、皆様方の毎日が健康に続いていきますよう祈念致します。

ドゥアン・プラティープ財団創設者 プラティープ・ウンソクタム・秦
この報告書は6月に届けていましたが、その後熊本にて豪雨災害が起こり、皆様にお伝えするのが遅くなりました。お詫び申し上げます。アルティック事務局



食料品や感染防止衛生用品の配布セット



消毒殺菌アルコールなどの手作業による瓶詰



スラム住民への感染予防セミナーを開催

●7月豪雨災害緊急支援

～皆様の募金により、充実した支援活動を行ってまいりました～

行うことができました！

アルティックでは熊本県の人吉・球磨地域を中心に、7月に起きた洪水災害の支援活動を行っております。皆様も感じているように、近年日本では災害が多くなっています。ここ5、6年をさかのぼっても各地で毎年のように起きています。アルティックではこれらの災害に関して、直接または間接的に支援を行っております。直接とは災害地が近隣の場合スタッフを現地に派遣して復旧、復興の支援を行うことです。また、間接とは被災地が遠距離の場合、現地に入っている信頼できる団体と連携して支援事業を推進することです。これまで大規模災害と言われる、阪神淡路大震災、東日本大震災、西日本豪雨、台風19号、熊本地震、そしてこの度の7月豪雨などの災害では直接の支援活動を行ってきました。特に昨年熊本で起きた豪雨による水害に関しては地元でもあり、物資支援、炊出し、ボランティアの送り出しを4か月間継続しています。今後は心のケアを中心に活動を行う予定です。

ところで、今回の活動では私達アルティックにとって特筆すべきことがあります。というのは、コロナ禍により県外からのボランティアさんは受け入れられないという規則になり、大災害にもかかわらず全国からのマンパワーを得られることができませんでした。そのため物資配布や泥出し、家の片付け、炊出しなどが思うように進んでいませんでした。そこでアルティックは、学生さんに限り、現地と一緒に活動して

動してくれるボランティアさんに5,000円の支度金をお渡しすることにしました。これは県内のみで何とかマンパワーを確保しなければならぬこと、コロナ禍でバイト先がない学生さんを支援するという一挙両得を考えてのことでした。おかげで、被災者の皆さんも学生さんも大助かりでした(5,000円はバイト代ではなく、あくまで支度金として食費や交通費、装備品代です)。被災者はこの学生ボランティアのおかげで、業者を雇って自分でやらなければならぬ部分を彼らがやってくれるので大助かりです。このようなことができるのも、会員様からのご寄附が有るお陰です。被災者にお金を直接お渡しはできませんが、結果的に募金のお陰で負担が軽くなっているのです。最近では水没して泥まみれになった床や柱を磨く作業が続いています。自分の親や祖父母が住むと想定し、埃やカビで2次被害にならないように磨き上げよう！と気合を入れて作業に邁進しています。

●他人事と思わず 災害に備える

さて、この度の熊本での洪水災害、そして5年前の熊本地震災害で、いくつか知見を得ることができました。是非とも皆さんにお伝えしてまいりたいと思います。

まず、どんな人も本能的に「自分は災害に合わない、自分だけは大丈夫」と思うものです。これは最近よく使われる「正常性バイアス」と呼ばれるものです。人は何かあるたびにパニックに陥っては精神的にストレスを感じて疲れてしまいます。中には鬱になったりする可能性もあるでしょう。そこで心の平安を守るための自己防衛としてこの本能があります。ただし、この本能のために生命の危険にさらされたり、実際に逃げ遅れて命を落としてしまったりすることがありますので注意しなければなりません。

災害時に避難せずにいた人達に話を聞くと①「自宅にいるのが安全と判断した」②「被害に合うと思わなかった」③「被害にあったことがない」。①は客観性のない自己判断です②は勝手な思い込みです③は誰もが皆そうです。

逆に難を逃れたかたがたのお話を聞くと④「テレビやメール、地域警報に従った」⑤「家族・親族や近隣の人、消防団、自治会関係者の声掛けに素直に従った」。少し不謹慎な表現ですが、何度空騒ぎに終わっても、楽しんで避難行動をとることです。また、最低3日間の家族分の水と食料の備蓄をして下さい。あとは何とかありません。

最後になりますが、地域との繋がりを大切にして頂くことこそ命を守る方法です。⑤のように、避難行動に消極的だったかたが、ご近所さんの声掛けに従って避難されて助かった例や、普段から気に掛けてくれていた自治会役員や近隣のかたが「あのお家の人が見当たらない、助けてあげて！」との言葉で、消防団に助けられて命拾いをしたという例がたくさんあります。「普段の繋がりが非常時の力」となるのです。是非とも人や社会とのご縁を大切に暮らして頂ければと思います。



物資支援



物資と炊出しの配布



福島から届いた励まし(ポスター)

末筆となりましたが、豪雨災害への多大なるご協力や募金を戴きましたことを心より感謝申し上げます。おわり

R2.7月豪雨災害支援活動(熊本県人吉・球磨)



福島から届いた励まし(フクロウ)



農地整備ボランティア



土砂撤去作業



冬物支援



全国から届いた物資の仕分け作業



数多くの橋が破壊されました



崩落した球磨川に架かる鉄橋



炊出



水没家屋のクリーンアップ作業



ミャンマー活動報告

アルティック・ミャンマー所長 平野 喜幸

遊具寄贈プロジェクト始動

イラワジ管区の学校から遊具の寄贈のお願いがありました。

私達アルティックは教師の人材育成研修を行っています。研修を終えた教師達が地元に戻り頑張っている様子を見て、何らかの形で応援したいと考えていましたので、そのオファーを受けることにしました。

普通、ミャンマーの田舎の学校には遊具設備はありません。ぼろぼろの学校さえなかなか修繕できずにいるのに、遊具などに回せる予算はないからです。しかし、皆さんも覚えがあると思いますが、休み時間や放課後に友達と一緒にブランコや滑り台、ジャンゲルジムなどを使って遊んだ記憶は人生における大切な宝物です。遊具が有ることで子どもたちの登校へのモチベーションが上がリ、少しでもドロップアウト（中途退学）が減ると確信します。

予算内で設置できる13校を選定し、第1校目は6月7日、2校目3校目は6月29、30日に遊具設置を完了しました。昨日ティダエ・タウンシップ（タウンシップ＝郡）のシェヒンダー

チュン小学校とピヤールボン・タウンシップのジャンクイン中学校を訪問し設置状況を確認してきました。

学校はコロナウイルスの影響で開校日が延びています。本来なら開校日まで遊具の使用はお預けとなっていました。地域の子どもたちが集まってきた、皆大喜びで滑り台を滑っていました。

全ての遊具設置が完了するまでには時間が掛かりますが、子どもたちや村人の喜ぶ姿を目の当たりにして疲れも何処かへ吹っ飛んでしまいました。



遊具寄贈に対して村から感謝状を戴きました



小中学校に設置された各種遊具



ミャンマーでのコロナ感染状況

7月21日ミャンマーの高校が例年よりおよそ50日遅れでスタートしました。当初の予定では、その一週間後に中学校、更にその二週間後には小学校が始まる予定でした。これまでも市中感染者は見つかっており、感染者が発見されるのは決まらず、外国人に限りませんでした。しかし、どういう理由からか、小・中学校は開校日になっても始まりず、開始は9月に延期されました。

小・中学校でも校舎のベランダに手洗い所を設置したり、教室内ではソーシャルディスタンスを守って机を配置したり、9月の開校に向けてこの学校でも保健省の指導のもと、周到に準備が進められていたのです。

ところが開校日寸前の8月21日、ラカイン州で第二波の感染が始まってしまいました。バングラディッシュからの不法入国者が持ち込んだという噂が流れました。その後、毎日10人程度の感染者が見つかり、8月27日に政府は全国一斉に休校することになりました。それでも私達は9月4日まで村の訪問巡回を続けました。

9月7日月曜日、事務所緊急会議を行いコロナシフトを敷きました。「会社事務所や事業所においても出勤率を50%以下に抑えること」という政府からの命令が下されたため、

アルティックの本部事務所（ヤンゴン）では一人の事務職員をイラワジの研修所に派遣し、他は交代で出勤させることにしました。

9月10日、朝から事務所の外が騒々しいと思いきや、私達の事務所ビルで、しかも同じ階でコロナウイルス感染者が発生してしまいました。警察が来て感染者の部屋の周りをテープで囲い、立入禁止措置が取られました。翌日には同階での塩素消毒が行われました。しかし、近隣の私達へのPCR検査はありませんでした。

また、ミャンマー政府の発表で9月11日から10月1日までヤンゴン管区の住人は他の管区や州への移動が禁止され、さらに他地域からのヤンゴンへの流入も禁止となりました。言うところのロックダウンです。マグエ管区というところがありますが、そこへ仕事に行った学校建設をしてもらっている現地建設会社の社長から本日電話があり、10月1日までヤンゴンへ帰れないということでした。アルティック職員についても当分イラワジ管区へのモニタリング等行けなくなってしまうました。

しかし、こんな時だからこそ日頃出来ない業務の見直しやスタッフの育成に力を入れ、解除後のスタートダッシュに備えたいと考えています。

9月12日現在、ミャンマーでのコロナウイルス感染者は2,245名、死者15名と発表され、概ね毎日100名のペースで感染者が増大しています。政府が出した移動禁止措置が功を奏し、感染者の増加のスピードが減少して、一日も早く仕事に戻れることを願うばかりです。

2020年度コロナ禍の 学校建設契約

さて11月となりました。お伝えしてまいりましたように、ここミャンマーでも8月下旬よりコロナウイルス第2波が襲来し、ロックダウンにより9月4日を最後に私達アルティックの活動地域であるイラワジ管区に行けなくなっています。

現在、毎日1,000人以上の新型コロナウイルス陽性者が発見されている状況が続いており、この先の見処も立っていません。

しかしながら、例年11月になると雨季が終わり学校建設の時期となります。今年もコロナ禍といえども、例年通り10月中旬より建設契約の準備を進めてきました。

そして11月10〜12日まで（2泊3日）の日程で6校の建設契約を行うためにイラワジ管区に行くことになっていました。イラワジ保健局には先月から入域許可を申請しておりまし

た。そして11月6日に返事があり、「イラワジに来るならば14日間の隔離措置に従わなければならない」と却下の通知を受け取りました。

そこで直ぐに計画を変更し、ヤンゴンの事務所建設会社とアルティックの2者が最初にサインを行い、これを各タウンシップの教育事務所に宅配便で送り、教育事務所長の前で村の建設委員会がサインをするという2段階の契約にすることにしました。

これで何とか今週中には6校の建設契約が終わり、2020年度の学校建設がスタートできます。コロナの状況がこれからどうなるか未知な部分はありますが、来年の4月の水掛け祭り前には全校の建設が終わることを祈らずにはいられません。

おわり



アルティック事務所建設会社との契約



教育事務所長と懇談する村人



教育事務所長の前で契約書にサイン

アジアの恵まれない子供たちに『お年玉』を!

●●●●●●●●●● 愛のお年玉募金 ●●●●●●●●●●

5年前私たちの地元熊本は大きな震災に見舞われました。日本各地はもとより、世界の国々からも心配と慰めのお声掛けや緊急支援物資を数多く頂きました。人が困難な状況にある時に、他人からの思いやりがいかに心強く、ありがたいものであるかを身をもって知ることができました。

さて、途上国では日常が飢餓、難民、貧困、人権、教育など社会構造的な困難に溢れています。

皆様には毎年「お年玉募金」をお願いしています。これは恒常的に困難に喘ぐアジアの人々への幸せのおすそ分けと考えています。目的と金額は以下の通りです。

学校建設事業支援

(ミャンマー農村部)

この募金はミャンマーの貧困地域における、学校建設の資金や備品の整備のために使われます。教育環境を充実させることで、より多くの子供たちに教育の機会を与えます。

一口：10,000円

本をプレゼント

(チベット難民)

チベット地方(中国チベット自治区や、青海省、四川省など)からインドに逃れている難民の子供たちにチベット語の物語や小説、副読本をプレゼント。

一口：5,000円 (5,000円でおよそ10冊の本を作成できます)

おまかせ募金

特に寄附金の用途を指定せず、当会に一任して頂ける場合の募金です。 **おいくらでも**

会の維持運営費

各種ボランティア活動を行うためには、現地への旅費交通費、現場との通信費、事務所の維持費(本部や現地)、現地スタッフの給与などが必要となります。このように活動を下支えするための重要な募金が維持会費です。

一口：年間 5,000円

ご寄附のお願い

れんげ国際ボランティア会はNGO(またはNPO)と呼ばれる民間の国際協力団体です。ODA(政府開発援助)とは異なり資金力がありません。しかし資金的には小規模であっても、本当に必要な人々に、心のこもった支援ができるよう努力を致しております。その努力が実り、活動に関しては、現地の人々からはもとより、外務省からも高い評価を頂いています(外務大臣表彰を受賞)。

今後もアジアの人々が日本に対して親近感を抱き、友好関係を築けるような有効な支援事業を続けてまいりたいと考えています。何卒、活動へのご理解を頂き、活動資金へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

■振込用紙は毎号お入れしています■

これは事務作業の手間を省くためと、「思い立ったときにいつでも振り込みできるように、いつも入れておいて欲しい」という要望があるためです。決して振り込みを強要するものではありません。恐れ入りますが、既にお振り込み頂いた方、ご不要の方はご処分をお願い致します。

第71号 2021(令和3年)1月

季刊/みろくの風(れんげ国際ボランティア会会報)

発行人/川原英照

住所/〒865-0065

熊本県玉名市築地2288

電話/0968(73)4851

◇各種お問い合わせ◇

(認定NPO法人)

れんげ国際ボランティア会

http://rengeshasha.com

e-mail regekansha@gmail.com @rengeshasha